

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	母国語教育の支柱としての「構え」、再考：連歌の発想を取り入れた就労支援施設のグループワーク実践から
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	国語教育思想研究 , 21 : 51 - 63
Issue Date	2020-10-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050399">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050399</a>
Right	
Relation	



母国語教育の支柱としての「構え」、再考  
—連歌の発想を取り入れた就労支援施設のグループワーク実践から—

児童の言語生態研究会 宮田雅智

キーワード 上原輝男 児童の言語生態研究会 母国語教育

1、はじめに（問題の所在）

私は玉川大学で上原輝男先生と出会い、それをきっかけにして児童の言語生態研究会に所属しました。公立小学校に10年勤め、体を壊して退職。以来中高生を中心に、社会人も含めての家庭教師生活を送っています。そしてこの4月から新たに福祉関連の施設でも講師を勤めるようになりました。

それが「就労移行支援及び就労継続支援A型事業所 エナベル水戸駅南」です。そしてその利用者の方々は精神科の医師からの診断がある方々です。エナベルに限らずこうした施設を利用する方々への差別や偏見は今でも多くみられます。

しかし実際に対話を続ける中で利用者の方々は非常に感受性が豊かで繊細で人間的であり、それ故にこの歪んだ現代の教育界・社会の中で成長・生活する中で心が悲鳴をあげてしまった結果なのだという場合が大半なのではないかと感じています。

逆に私の中には「現代社会に適応できたと言われて人達の方が本当に大丈夫なのか？」という懸念が生じています。本当に内なる力によって現実対応ができていけるなら問題は大きくはありません。しかし幼い頃から「適応できている自分を演じることが競争原理・成果主義の社会で生き残っていく唯一の道である」と必死になっている人達ほど、実は非常に危うい精神状態になっているのではないかと…。適応しきれない人たちの問題は早急に教育や社会の根本的な見直しをという声があちこちで上がって久しいですが、もしかするともっと早く手を打たなければならないのは、表面上は何事もないようにしている人たちなのではないか、という心配です。

そんな現代社会の状況において私が真っ先に再確認すべきなのが「母国語教育」であると考えます。

恩師である故・上原輝男先生（玉川大学教授・児童の言語生態研究会主宰）が常に強調されていたのが、母国語の獲得段階である初等教育における国語教育の大前提となる「言語観」でした。

『一般的な言語観は「言語道具観」なんです。…ど

のくらい表現する道具としての言葉を持っているか、が問題になるんです。これで教科を組むと塾教育になってしまうんです。～歳でいくつの言葉を覚えた、なんていうことになってしまうんです。こんなのは教育の名には値しないですよ。教育は人間に立ち向かうものなんですから。

本来の立場は、時枝誠記の唱えた「言語過程観」なんです。これが日本人の考え方だったんですよ。…思考などの道筋だって一人一人違うのですから。だから過程を飛躍することなど出来ないんです。人間は過程でしか生きられないんですよ。』（昭和58年 国語教材研究 玉川大学講義にて）

このことについて、さらに具体的に述べているのが次の言葉です。

『母国語は、知・情・意の発達過程とともに獲得される言語であり、外国語は、母国語の獲得のちに習得する言語で、母国語が生理的に出発し、反応するのに対し、外国語は、今日の外国語学習の通念が改められない限り、一般的には、母国語の翻訳的意図から出発した言語構成法を学んでいる。』

われわれは、特に本研究会におけるわれわれは、母国語の習得過程は、人間の生育段階の生態的現象として把握すべきであることを共同の歩調としている。…われわれは、殆んど発足当初より、人間の生育段階の生態的現象の把握に「構え」の観点を導入すべきことを提唱して来たのである。』

（雑誌 児童の言語生態研究 8号 特集 こどもの構えの変革とことば 内「母国語学習指導の支柱 “構え” の提唱」ページ 1976）

児童の言語生態研究会では国語教育を便宜上4つの領域「思考」「感情（イマジネーション）」「構え」「用具言語」に分けて考えているのですが、この先生の言葉から考えると、「思考」「感情」「用具言語」の分野が統合されて、具体的に生きる姿勢として表出するのが「構え」である、ということになります。

先に「母国語の獲得段階である初等教育における

国語教育」としましたが、生涯のすべての段階にわたって日常生活で母国語を使って生活している以上は、中学校以降の教育もこのことが基本になります。

全教科・領域が母国語の発達に様々な形で寄与し、学校教育を離れても全生涯に渡って人生を左右していくことは言うまでもありません。しかし高等学校などでは早くから進路指導の名のもとに「文系・理系」などという仕分けがなされて、感情・イメージと知識・思考は対立するものであるという発想が当然のごとく教師にも学習者にも植え付けられています。

そのことを改めて思い知らされたのが、エナベルでの体験です。ここでの体験を通して学校教育を振り返ってみた時に、改めて「母国語教育」の歪みが社会人になってどのように深刻な影響を及ぼすのかを痛感しました。

特に後天的に精神を病んでしまった方々は、人生の中の様々な場面で投げかけられてきた言葉を非常に素直に受け取っています。それが強力は呪縛となってしまうのです。そして「自分は精神疾患だから」という負い目がさらにそこに拍車をかけ、自己催眠状態になっているかのように感じられました。

情報過多ともいえる現代社会、若者たちはスマホなどを通しての知り合いとの昼夜問わずの対応に追われて、自分をじっくりとふりかえる余裕も失っています。

このようにして現代人の多くが言葉の呪縛から解放される術を学ぶチャンスがないまま大人になり、閉そく感の日々を送ってしまいます。

その根源に横たわっているのが「母国語教育の歪み」だと考えているのです。

そこで本稿では母国語についての認識を本来の形に戻すための実践、特に「構えの変革」を狙うために「連歌的発想」をいれる試みをしている点を中心に述べたいと思います。

この実践が、福祉分野に限らず、広く一般に現代の教育や社会全体の歪みの是正に向けて何かしらの形で参考にして頂きたいと願っています。

\*『児童の言語生態研究』（以下「児言態」）の論文は、広島大学リポジトリ内ですべて閲覧できます。  
<https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/JidouGengoSeitaiKenkyu>

本稿の前提となる私の考え方を詳しく述べているのが次の原稿です。できれば、それらに目を通して頂

いてから、本稿を読んで頂けると、何を問題にしようとしているのかがより明確になると思います。

\*世界定めの主体としての我ー全生涯を貫く児言態的視点ー（児言態雑誌18号 2018a）

\*世界定めの主体としての我ー全教科・領域に渡る児言態的視点ー（児言態雑誌19号 2018b）

これらの記事の元となった家庭教師での体験をまとめたもの

\*生命の指標（らいふ・いんできす）は我が内にあり：「児童」後の子ども達への児言態的实践（児言態雑誌16号 2004年）

\*「あれこれ」の中から育つ構えや活力・生命力：「重ね合わせ」という発想の獲得（児言態雑誌17号 2009年）

## 2、「エナベル」の概要と出会い

エナベルとはどういう施設なのか、HPから引用します。（<http://hw-enable.com/>）

『身体・精神・知的などに障害を抱えた方に対して、働ける場所や様々な学習を提供して、一般就労を目指す訓練を行える事業所です。…コミュニケーションスキルを伸ばし、働くための自信をつけたい！SSTやグループワークにて他者との関わり方の訓練やストレス緩和の対処方法などをみつけていきます』

こうした施設を「就労支援施設」といいます。「就労支援施設」は国の就労継続支援事業に位置付けられる施設です。雇用契約を結び利用する「A型」と、雇用契約を結ばないで利用する「B型」の2種類があるそうなのですが、エナベルはA型の施設です。

私は、この「グループワーク」の講師として本年4月22日から、週2回関わっています。

参加されている利用者の方々は年齢も病歴も非常に多様ですが、本稿では「学校教育」を見つめ直すという観点から、学校や職場などの影響による後天的な精神障害で悩んでいる方々の事例から考察した内容を中心に述べていきたいと思っています。

そもそも私をこの事業所に紹介したのは、かつて小学校2・3年生時代に担任し、その後も縁あって関り続けている社会人のコバルト君（駿煌会（注1）ネーム）です。私を紹介するにあたって当時考えていたことをこのように述べています。

(彼はエナベルに施設外就労体験の場を提供している会社の社員です。)

『就労支援施設という自立支援を目的とする所は結局の所は教育という所に行き着く。もちろんそれは受験教育ではなく、社会で生き抜く為の本物の人間教育をしているんです。

そうした目的と、先生のずっとやってきたいろいろなことを「構え」につなげていく教育はエナベルにピッタリだという直感で、社長のWさんに提案したら、社長もそういった試みも面白そうだとになり、やってみようという事になりました。

自分は福祉と教育(宮田式)という視点がエナベルで交われば本物の就労支援施設の柱が建つと感じたんです。

多くの福祉施設が作業訓練に終始してしまっていますが、インスピレーションがないイマジネーションは根無し草にすぎない。ただなにも考えずにやる作業に生き甲斐なんて見い出せるのでしょうか？そうした作業の繰り返しだけではなんの脈絡も無い場面の漢字ドリルをひたすらやっている感じでどんどん生命力が疲弊していく。

でもその一方で、どんなに些細な単純作業でも生き甲斐さえ見い出せば立派にこなせる。

そういう意識作り(土の耕し)がエナベルのグループワークの本質だと思っています。ちょっと言ってみよう、やってみようから始めるステップの積み重ね。就労するにしても、インスピレーションから始まる延長線上に就労に結びつける事が重要なんです。』

さらに彼は、上原先生流に言えば「構えの変革」(トランスフォーメーション)(後述)にあたることに関してこのように述べています。

『グループワークの中ではパッパと思った事を瞬発力で言ってもら。それは心から引っ張り出してほしいから。そしてそれが本当の心の治療にもなるし気持ちから立ち直るきっかけにもなるんです。

エナベルの大多数が感じた事が直ぐに言えないという部分は心を押殺しすぎて来てしまって大きく疲弊しているから。ポンポン感じた事が言えるようになれば自然と心が蘇みがえる。

それが地獄を極楽に変える方法。地獄には故郷意識がないから地獄になる。でも地獄に故郷意識があれば極楽に転換する。』

コバルト君が「構えの変革」が就労支援事業など

の場合にも欠かせないという点に着目して私を紹介したというのは非常に注目に値します。また「構えの変革」のために「パッパと思った事を瞬発力で言ってもら」「ポンポン感じた事が言えるように」と提言しているのも大切なポイントです。

### 3、「エナベル」のグループワークの実際

グループワークは自由参加制、一回の参加者は2~5名です。毎回参加して下さっている方もいらっしゃるいますが、ほとんどの方は不定期です。ですから系統的・計画的なカリキュラムというようなものもありません。毎回、利用者さんの要望や、やりとりの最初の雑談をきっかけにして内容を膨らませていきます。

しかし私は正規の職員ではないので、個々の利用者さんの状態については原則として知らされていません。話の内容によってはトラウマを刺激し、精神的発作を誘発する危険もあるということなので精神疾患についての具体的な話題にふれるのは、私からはなるべく控えるようにしています。

そんな福祉の分野に関して全くの素人である私と福祉の専門家の方々との相乗効果がこれまでとは異なる成果を生めれば…と願いながら過ごしています。

当初から共通して出ている利用者さん達の悩みが「自分にはコミュカ(コミュニケーション能力)がない」という事でした。苦手な面接を事前の練習で何とかクリアしても、問題なのは就労後のコミュニケーションだということでした。折角仕事につくことができても、あらゆる状況でのやりとりが飛び出す職場では通用しない。仕事上だけではなく休憩時間の会話にも混じれず孤立してしまう。それで結局は辞めてしまう場合も少なくないということでした。自分のちょっとしたことが相手にどう思われてしまうのか、特に「コミュ障」「発達障害」ということで「自分には相手の気持ちも場の空気を読むことができない」と悩んでいる方々にとっては、知らない話題に対して場違いなことを言ってしまうのではないかとこの恐怖は非常に強く働いてしまうということでした。

そうした事に対して「皆さんは今までどうされてきたのですか？」と問うと「我慢しかないです。関心のない話題であっても、職場いじめにあっても我慢して付き合っていくしかない。」というのが最も

多い回答でした。しかしそうした我慢をずっと続けた結果、「精神疾患」と診断されるまでになってしまっているわけです。でも皆さんは「我慢できるようになる」ことが、今の自分にとって必要だという考えに固執されていました（注2）。

利用者さん達からよく質問されたのは「どうすればコミュニケーションの能力がみにつくのでしょうか？その方法が分からないです」ということでした。「どんなに説明しても自分の気持ちを100%そのまま分かってもらえない。だから伝える技術を身に着きたい」…コミュニケーションが苦手なのは、そのスキルを身に着けることができていないからだと考えているのです。

実際にはどんなに頑張っても深層心理レベルになればなるほどお互いにどのような気持ちなのか分かり合うことは出来ない。深層心理の第一人者である河合隼雄先生もそう言い切っておられました。（注3）それにも関わらずこうした発想になってしまうのも、ここ数十年の実質テストの解法に向けた学校教育の影響や、お手軽に相手の心理が分かるという類の本などの影響ではないかと感じています。

教育理念等々では理想的なことを掲げていても実際の授業によって定着しているのは、テストの解答のような形で人の心をとらえる事ができる、そしてパッとそれが分かって解答できるのが優秀な子というイメージです。

コミュニケーション能力をあげるのに必要なのはテクニックではありません。「構え」の問題です。それ故に「構えの変革」につながっていく他の様々な領域を総合的に扱う必要性がでてくるのです。

#### 4、グループワークで大切にしたこと①「構え」

グループワークでは毎回様々な内容が飛び出し、話が錯綜します。それらの多様な内容はすべて「構え」へのつながりを意図してとりあげています。

様々な領域が「構え」にどう統合されていくのかを詳しく説明することは出来ませんが、上原先生の言葉から比較的分かりやすいものを紹介します。（児言態夏期合宿 1982年8月5日）

『知的な面と情的な面とをそれぞれ別個に扱ってみただって、子どもは成長できない訳ですよ。それは人間であるから。知的なものと情的なものとの係り合いが出てくる。その係り合いの出るところが「構え」なんだということなんです。…児言態は四つの

領域を考えて授業を進めようと、そういう形でやってきた。「思考の領域」「感情の領域」「構えの領域」そして「用具言語の領域」と。

これだって四領域と言って今日は用具言語の方ははずしてあるけど、じゃあこの三領域だってバラバラである訳はないんでね。人間の頭の中っていうのは必ずこれはかみ合わさってなければならぬ訳でしょ。…授業としては「今日は思考で取り扱う。この問題を取り扱います」或いは「今日は感情でやるよ」「今日は構えをやるよ」なんだけれども、授業者としては「思考・感情・構え」というのは、やっぱりあの絶えず隣接しあうもの、三つの要因から構成されているって考えていかなければならぬだろうって、私は思うね。』

これまでも「”構え”ってどういうことですか？」と問われることはこれまでもよくありました。一般的な言い方で一番近いのは「関心・意欲・態度」となるのでしょうか。

しかし上原先生が考えられていた「構え」とはもっと人間の根底と関わるものが含まれると考えます。通常の「関心・意欲・態度」は個々人が自分で認識できる部分が大半であるのに対して、「構え」は「無意識の偏向性」を主として考えます。そしてこの偏向性を及ぼす要因として「思考」「感情（イメージーション）」「用具言語」が深く関わっているわけです。

心意伝承研究との関連もあって、幼い頃からのイメージーションの世界を探る事は上原先生の大きな課題の一つでした。しかしその一方で、人間の成長過程としては、中学年で現実的なものの方や論理的な思考に目覚め、夢の世界をベース（分母）にして現実世界（分子）を生きてきた姿勢が、逆転することも重視されていました。中学年以降、低学年の頃のような純粋な夢の世界を捨ててしまうわけですが、そのことをどう捉えるのかによって、教育全体の見通しが大きく変わってしまいます。

幼い頃からのイメージーションの世界を温存するような形で現実思考や知識・概念の影響をブロックするのか、一度夢の世界を捨てて、それを超えたところでこれまで自分の奥底に眠っていた新たなるイメージーションの世界に出合っていくと考えるのか、です。私は後者の立場です。（宮田2018b参照）

上原先生は、中学年を担当したら論理の訓練をきちんと行うように、と繰り返し学生などに説いてい

ました。それは正確なコミュニケーションを行うためにというよりも、「感情とは異なる言語の世界があることに気が付き、自分の感情と言葉を切り離すことができる」ということに主眼がありました。

つまり、「感情思考」「イメージ思考」とは別の「論理思考」の獲得や、「新たな知識・概念」を取り込むことによって、今までの自分を縛ってきた「思い込み」「常識」などを一旦捨てて解放される。そこからイメージ運動が再起動することによって、自分が知らず知らずに封印してしまっていたような、さらに奥深いところのイメージ世界が浮上してくる…それが新たな構えの構築になる、という流れです。

「構え」が大きく変化する（構えの変革）ような内面の変化を上原先生はトランスフォーメーション（意識の転換）と呼んでいました。

無意識の深層から出てくる世界は、現代社会や通常の人間の常識から離れていることもある「人知を超えた領域」です。そうした未知の自分の世界と出会っていくために、上原先生は論理思考の訓練や、中学生以降の段階では知識教育も必要だと説かれていたのだと考えます。（駿煌会のやりとりの中では西田幾多郎先生の「純粹経験」もれに通じるのではという話が何度か出ています）

そこで最初の頃のグループワークで繰り返したりあげたのが、日本古来の言語観・世界認識・組織論などです。西洋文化をベースとした現代社会の常識の方が日本人の体質に合わないことが多いということをもまず認識してもらうことが目的です。

しかしその場合でも、一般の授業や講義のように、「私の意図することにみんなで迫っていく」というのではなく、その事柄を土台にして利用者さん達なりに「どれだけ多様な話題とつなげていけるか」に重点を置きました。

## 5、グループワークで大切にしたこと②

### 「連歌の発想」の導入

もう一つ大切にすることがコミュニケーションに対する認識を広げるために、グループワークの進め方そのものが実践の場になるようにしていくことでした。具体的にいえば「伝えたい物事」を「如何に伝えようとするか」という一方通行の流れの「伝達型コミュニケーション」ではなく、多様な話題に対して、お互いに言葉を交わし合うことで互いの多様な意識世界などに触れ合い、やりとりの内容をど

んどん広げていく「拡散（思考）型コミュニケーション」の場です。

そして、そのことを本稿では「連歌の発想を取り入れた」と称しているわけです。

令和元年10月19日に私立聖徳学園小学校で行われた国語部と児童との共同研究授業は連歌を取り入れてのものでした。このきっかけになったのは、同年8月11日、駿煌会メンバーとのやりとりの場での難波博孝先生の発言からでした。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：  
宮田 いい意味で想定とか予定調和をぶち壊す…新たな発想に転換できる…そういう他の児童とのやりとりを授業の中盤あたりに持ってくるとかね。自分の今意識していることとか、無意識でも出やすいところじゃない部分…地下2階とか地下3階を掘り起こし合うような他の子とのやりとり…。

難波 それを聞いていたら…例えば「連歌」とか「連詩」とかいうのもいいかもしれないね。

宮田 自分が思っている通りには作れないという「制約」が、逆にものすごい広がりを生んでいったわけですね。

諷虹（駿煌会ネーム） 「縛り」とか「負荷」をかけることで、っていう感じですね。

難波 連歌って相手の五七五に対して、ただ七七をつけるだけじゃなくて、何句目には必ず月を入れるとか、そういうのが全部決まっていたんで、その制約がかえってむしろ想像を呼ぶ…。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：  
先に述べた上原先生の中学年以降の意識の成長、「新たな構えの獲得」に直接関連する、日本人にとっての日常的修練の一つが連歌であったということです。他者とのやりとりを「楽しく行う」ための基礎トレーニングとでもいいでしょうか。

研究授業が行われた日以降、駿煌会メンバーでも連歌のやりとりを実際に難波先生も交えてずっと行っています。

それを通して気が付いたことの一つが「ふるさと意識」との関連でした。「自分の居場所」としては「ふるさと意識」も広い意味で「おうち意識」と共通しています。でも、他の家々やよそから来た人た

ちとの接触が絶えずあるという点が「ふるさと」の独自性となります。

連歌のやりとりは個人の想いのまま中心の「おうち意識」ではできません。自分がその話題に詳しくあるが無知であろうが、前の人を句をふまえてつなげていく…自然なつなげかたもあればひねりを加えたつなげかたもある。また自分の詠んだ句が、意図通りに受け止められて次の句が詠まれるとは限りません。むしろ思いがけない受け取られ方をして広がっていく方が多いわけです。そして次に自分に回ってきた時には、それこそ想定外の句になって戻ってくる。そうした呼応関係から生まれる新たな世界。

ここで大きなポイントとなるのは、それが「ナマの実感」から離れた「言葉遊び」の範疇でなされるということです。自分の感情などの縛りから解放された状態で前の句を受け止め次の句を発想する…そして自分の意図とは違った受け取られ方、思いがけない発展の仕方をされる…そんな他者との関りを面白がれる心との出会いです。

現代人にとっても、他者の存在がどうしても負担としてのしかかりがちなのですが、難波先生の元教え子である秦恭子さんは特に高学年以降の教室内の理想の人間関係についてご自身の体験からこのように述べています。

『子ども達自身とか子ども達相互がいろんなことを思ったり言い合えたり、そういう交流を通してたくさん刺激があるといいですね。（そうしたやりとりの中で）本当に自分が生きているナマの体感を先生はみていてくれる、分かってくれている、って。それが一番子どもが望むことでもあると思うんですよね。』（2020,8,24）

駿煌会では36歌仙になぞらえて36句で一区切りしているのですが、それらの句がただの連想の寄せ集めではなく、毎回一つにまとまった世界が出来上がっている、ということがメンバーにとっては新鮮な驚きです。駿煌会での基本的な発想の中に「量子論の重ね合わせ」があるのですが、個々がバラバラなようでも、一つにまとめると個々人を超越した何か大きなものが浮かび上がってくる。意味を感じ取れる。ここから生まれる他者との響き合いの心地よさがベースになるかないかもコミュニケーションの問題にとって非常に大きいと思います。

エナベルのグループワークでは一回2時間のやりとりが、どんな風に拡散し、発展していくかは私に

も利用者さん達にも分かっていません。とにかく一人一人から出た発言や、そこから私が感じたことを、次々とホワイトボードに書いていきます。

また、先ほどもふれましたが、精神疾患等々の具体的なナマの話題は私からは投げかけないようにしているので、話題としては世間話やアニメなど就労支援のグループワークの話題としてはあまり関係なさそうなものを敢えて積極的にとりあげています。

そうした知らない話題について強い拒絶反応をされたこともありましたが、しかしこのことも「知らない話題であっても接点を見だし話に入る。そして知らないからこそ、知っている人とは違う発想ができるし、当たり前的发展ではない方向性を生み出せる」ということを実感して頂くために大切だと考えています。

そのような2時間の結果の集約が毎回のホワイトボードです。自分の言葉もあちこちに書かれて全体が埋まっている、というのは「コミュ障で表現ができない」という自分達がこれだけのやりとりをしたんだという事実であり、驚きであるようです。

毎回のグループワークの最後にその板書を眺めながら「今日もこんなに話が広がって、全部埋まって、こんなことが浮かび上がってきましたね」とみんな振り返ることが、36句のまとまりをふりかえる時と同様な感覚になっています。それが構えの変革へも大きく寄与していると思います。

## 6、利用者さんの声から

本来なら実際のやりとりや、板書の画像を紹介しながら、もっと具体的に国語教育の観点からまとめられれば良かったのですが、今回はほとんど割愛しました。

\*それらについては順次、駿煌会のHP

(<http://syunkoukai.komusou.jp>) で紹介しています。

かわりに利用者さんたちの声を紹介します。まずはグループワークにほとんど毎回出席されてエナベルのブログに時折その内容を見せてくださっているKさんの記事 (<http://hw-enable.com/> 内「Kのきまぐれ日記」) からの抜粋です。

『今回のグループワークでも様々な話題が出ましたが、主に擬人化に関することについて話しました。…日本ではなぜ抽象的なものの擬人化がされるのかなどの話題が出て、今回も色々なアニメや特撮のキ

キャラクターの例が出てきました。…

そこには、日本と外国の概念や宗教観などの違いがあるようで…日本には八百万の神がいてこの世は現世（投影）であり、付喪神などものにも魂がやどるとされ、ものの擬人化がなされるようなベースがあったというようなことをM先生から聞き、なるほどと思いました。…

今回のグループワークもいろいろな話題が出て、まさにカオス状態でしたが、カオスな中にもつながりがあったりして、面白く、興味深いものでした。次回のグループワークにもぜひ参加したいです。』（令和2年5月25日ブログ）

次に利用者の一人である五常さん（仮名）が書いてくださったグループワークに関しての手記からです。

『施設外作業の際に、駿煌会所属の方に話を聞き、グループワークの講師である宮田先生が彼の恩師であり、その話の内容について、少し語ってくれた。量子学説から神道、更に概念的な考察まで、様々な話題について語り合う会合。それが駿煌会だという。更なる興味を膨らませた自分は、施設に戻り、午後に期待を持ってグループワークに臨んだ。

結果的には、想像以上の楽しい時間だった。自分の友人たちと酒の席で色々話した時のように、自分の思考、考察、思想について語らう、とても濃厚な時間だった。それ以降、施設外作業にフルに入るまでの間、グループワークには積極的に参加したものだ。

グループワークに参加した他の利用者は様々。受け答えがセオリー通りの者、ただの暇つぶしで参加する者、積極的に発言して有意義な時間を求める者、まさに十人十色であった。

そんな中で、とある参加者が投げかけた一言が、水面に漂う波紋のように次々と広がり、連鎖していく。ホワイトボードがびっしりと埋められていく。その様を横で眺めているだけでも、楽しいものだ。』

ここで彼もふれてくれています、グループワークに参加する方々の意識も実に多様です。それでもみんながホワイトボードのどこかは埋めているし、そこから話が広がっている足跡が残っているわけです。それがどこか「ふるさと意識」という自分の居場所意識につながっているようです。

## 7、「呪縛からの解放」への4つの柱

### ①「世界定め」の理解

「みな同じ社会の中で生きているのだから、同じ意識であると思うのに、自分はみんなと違う。それは精神疾患だからだ」という呪縛は非常に強いものです。しかし本当は精神疾患でなくても個々人の意識世界は異なるということについては様々な事例を通して語り合っています。

構えが異なれば物事の受け止め方も変わる…それがみな異なる意識世界を発生させ、それぞれにとっての「現実」となるわけです。（宮田2018a参照）

同様に「何故周囲は自分を理解してくれないんだろう」という場合も、それを相手の無理解を責める形になると「人間不信」に陥り、自分の伝達力のなさを責める形になると「自己否定」に陥ってしまいます。

こうした異なり・すれ違いの要因はどういったことにあるのかという確認です。それが成されているかどうかで構えの変革の起こりやすさはだいぶ違うと感じています。

同時にまた「世界を定めている基準が変化すれば物事の良し悪しもひっくり返るのが普通」ということも繰り返し話題にしています。例えばユングもアフリカやインドなどの旅行での体験で、ヨーロッパと全く異なる基準の世界に触れたことを自伝に述べています。（注4）

グループワークでは「二つ目のおばけ」（注5）という昔話をよく引き合いに出します。「一つ目の国」で「二つ目のお化け」として見世物にされたしまった男の話です。

これと似たようなことはこの世の中に沢山ある…西洋流の発想が入り過ぎて日本人の体質に合わない制度ばかりにさらされ、適応できずに精神を病んでしまった人間の方が「障害者」として偏見・差別にあうというのはまさにそれです。

教育現場でいえば時代や教師個々人の価値観による評価の違いです。ある教師にとっては独創的で好奇心旺盛な子が、別の教師にとっては教えた通りにしない、指示に従わない問題児となってしまう。

昨年来、駿煌会の中でも難波先生とギフテッド教育についてのやりとりがされているのですが、たまたまある基準からずれているために「〇〇障害」とレッテルを貼られてしまう怖さです。エジソンなどはその典型と言えましょう。

私の勝手な印象ですが、今の子ども達は私達の頃



ほど伝記にふれていないような気がします。歴史に残る人物の子ども時代を知ることは、大人や社会が勝手に決めた基準から外れることが絶対悪ではないことを教えてくれる大事なことだと思います。

## ②みえないものへの意識

グループワークで何度もとりあげるのが古来から日本人が抱いてきた「みえない世界こそが実態」としてきた意識です。だから言葉も「事のハ」であり本質を言い表すことはそもそもできないと感じ取ってきたということ。それが端的に表れたのが和歌の世界や水墨画の世界で、目に見える形にするものは最小限にする、直接気持ちを表現するよりも情景描写よっての共感に委ねる、余白にこそ大きな意味を感じる…そのような事例をたくさん紹介しています。

私が小学校に赴任した頃（昭和61年）、ちょうど国語教育で盛んに言われていたのが「叙述に即した確かな読み」でした。それによって現場では「文に書いていないことから確実に分かることだけしか想像してはいけない」という風潮が非常に強くありました。同時にそれは「表現されていないものは存在しない」という発想にもなっていたようです。だから発言でも作文でもなるべく沢山の言葉を使うほど内面が豊かな優秀児というような発想での指導として表れていました。

そうした風潮は今でも根強く残っているように感じます。みえない部分を問うテスト問題はほとんどありませんから、人間の無意識の層などにまで考えを深める必要もないとされてしまいます。

それがコミュニケーションに関する意識に最も象徴的に表れているのです。確かに筋道を立てて、きちんと自分の考えを詳しく述べる必要がある場合もありましょう。でもそれは感情生活の場面というよりは、会議や情報伝達としての能力です。

それが苦手だからといって、本当にコミュニケーション能力がないということが言えるのかどうか。

『ことばが劈かれるとき』（思想の科学社）の著者である竹内敏晴氏が言葉を発しない自閉症の子どもをみていて、意志表示の言葉を発していないとみんな思っているけど、この子は全身で「あなたとはふれあいたくない」と意思表示をしているのではないか、という事に気が付いた…という趣旨のことを述べられています。言葉なき言葉も表現であるとい

う発想です。

小学校に就職し、自分なりのスタイルでの授業が許されるようになった頃から、物語文の国語の授業では通称「意識構造の図」というのを黒板いっぱい書いて行っていました。海の上に顔を出している島のイメージです。海面上にみえているところが、文章に表現されている言葉や態度。水面の下に「意識世界」そのさらに下に「無意識世界」が何層にもわたって存在し、やがてそれは他の島々とつながっていく。「潜在世界」⇒「心意伝承の世界」・「集合的無意識（元型）」の世界を図式化したものです。そこにクラス全員の意見を短冊に書いてみんなと位置を検討しながら貼っていきました。

このスタイルの最大の特徴は、期待される答の当てっこというような方向に児童の意識が向かないことでした。どんな意見でもどこかには位置付けられるし、その場面の登場人物の全体像を浮き彫りにするのに必要な発言ということが感じ取れます。また人間には相反する心が多様に存在するという事も視覚的にわかります。

多数決のように授業が進むのではなく、むしろ図の中の空白部分にまだ誰も気が付いていない心が隠れているのではないか、という感覚で参加していたので、人と違う意見だから自分は駄目なのではないか、という危惧を抱く児童がいなくなりました。

それと似たような状況にエナベルではなっています。今まではみんなの意見と違ったらどうしよう、ついていけない話題ではないから…それゆえに「何も浮かびません」と自ら考える前に思考を停止させる傾向が多くのみなさんにみられたのですが、逆に「まだみんなが気が付いていないことがたくさんある。それを言って板書が埋まったら面白い」というようになってきている方もはっきりと増えてきています。

## ③言葉の意味の再確認

古代中国人はイメージを文字の形に込めたように、日本語は「音の響き」にイメージを込めてきました。それが単なる意味の問題にとどまらず「言霊信仰」と呼ばれるものにまでなっていたわけです。

情報化社会の中、外来語がこれまで以上に氾濫して日本語の音への感覚がますます鈍る中、漢語・和語の持つ意味を比較しながら現在の自分の認識がどのようになっているのかの確認には大きな意味を感

じています。

グループワークの中でもっとも反響が多かったのが「籠る」についてでした。

「ひき籠り」という言葉が大きな社会問題を示す言葉になっている影響で家や自分の部屋に「籠っている」というのは精神を病んでしまっていると診断されている方々に限らず現代人にとって自己否定の大きな要因になっています。

しかし本来「籠る」ということには大切な意味があったということ。「困る」研究をしていた際に上原先生が語られていたことがあります。「困」という漢字が木が囲まれて伸びられない様子というのは古代中国の発想。日本では本来は「修行で山に籠る」などのように純粋な世界に浸り、次への生命エネルギーを蓄積している状態をいうのである、と。

それは「母胎回帰性」ということ…おうち・ふるさと意識の根源もこれである。閉じた空間は子宮。家(内)に「帰る」は「孵る」であり、「生まれなおし」(甦り)をして再び外に向かう。布団に包まれて寝るのも、風呂に浸かるのも神社のお参りもお盆の帰省も根源はみな同じ。上原先生はそうした構えの变革について「裁断と継続」「死と再生」という言い方もされていました。現実生活への絶望に真正面から向かい合うことが、次への生まれ変わりになる、ということです。

「現実か非現実か」という二者択一の発想ではひき籠りは単なる現実逃避になってしまいます。しかし、現実をしっかりと受け止めた上での「籠り」は、現実意識を人間的なイメージの世界で包み込んで乗り越える力を与えてくれる。いわば「超現実の生き方」の構えと通じています。

もともと日本人は相反するものを包み込んで発想するのが得意な民族だったはずです。そうしたことも例えばことわざが生活の中に生きていた頃などは自然に培われたのだと思います。矛盾を矛盾ともせず、そうした数々の両義性を一つに出来た。余談ですが中・高校生以降にこうした発想を紹介するときには敢えて国語ではなく自然科学を教材にします。最先端の科学が古来からの日本人の発想にむしろ近づいている、という事実を押さえています。

もう一つ反響が多かったのは「失敗」と「間違い」の違いについてでした。かつては「失敗は成功のもと」…失敗の経験を次に生かせばもっといいことができる…とされていたわけですが、競争原理ばかり

の今の世の中においては「失敗」は文字通り「敗れて失う」を意味します。

「勝ち組・負け組」の仕分け…しかもそれが幼少期から行われ、たった数回の失敗で今後の成長は期待できないというような烙印を押される怖さも学校や社会に植え付けられている歪んだ見方です。

そもそも学校も社会もありとあらゆる事で人間を評価し、ランク付けし、勝手な価値基準で人間としての存在意義まで脅かしすぎです。

失敗して挫折し居場所を失うくらいなら、初めから何もしない方がいい…という構えが幼少期から広がっています。それはエナベルの方々も例外ではありません。

しかし古来から日本では「失敗」を「間違い」という意味でとらえていたという話を紹介します。「間の取り方がずれただけ」であり、そこから「因果関係」に気が付いていけば、「さらなる多様性や応用性を身に着けることができるチャンス」ということです。人格の否定どころか、そうした人間は生きた知恵を獲得しているということでむしろ積極的に登用することすらあったようだと。そのような話のやりとりから、自分を責める構えが多少なりとも軽減されたようでした。

学校の授業でも同様だと思いますが、「間違っただけを言ったら笑われる・怒られる」という恐怖心からの解放は重要な柱です。

#### ④母国語としての実感

標準語も日本語である以上、母国語であることには違いありません。しかし、標準語を絶対視されたことで心が病んでしまった体験についても、さきほどの五常さん(仮名)が手記を書いてくださいました。長文ですが、なるべく原文に近いまま紹介します。

『そんなグループワークに参加を続ける内、「本来の自分」を解き放てるのでは、と思い、それまで封印していた故郷の方言を解禁した。吹っ切れた、というべきだろうか。

自分はそもそも、生まれも育ちも大阪だった。…(関東の会社に就職。寮施設に入る。研修期間を終えて配属されての)初日の朝礼で、配属された部署の工員たちの前で、自己紹介をした。自分の言葉で。我ながらしっかりと自己紹介ができたものだと満足していたのだが、朝礼終了後に上司に呼び出さ

れ、衝撃の一言を受ける。

「お前の方言は失礼に当たる。今後は標準語と敬語を使うように」

厳しく詰問するような口調で、まさしく命令されたその言葉に、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。それまで、確固たる意識を持っていた自分のアイデンティティを、即日の内に否定されたのだ。その瞬間、悟った。……ああ、ここでも「自分という人格」は、誰にも認められないのだと。

実家にいた頃も、親父に、妹たちに、教師に、同年齢の子供たちに、自分は否定され続けた。「お前なんぞにできるわけがない」「何も考えてないくせに口出すな」「お前が死ねば、その分浮いた食料や空気で、どれだけのアフリカの子供たちが救われるか、考えたことがあるのか？」等々。……もう、うんざりだった。自分の思考、価値観の確立。その自由を得るために実家を脱出したはずなのに、その脱出先でも自我を封殺される。絶望しかなかった。

故に、自分はやむを得ず「仮面」を被ることにした。高校時代の学校生活で、誰とも会話しなかったのと同じように、彼らに恭順したように見せかける仮面。その日から、上司の言葉に従い、お国言葉を封印して、何も考えず、言われるままに動くだけの人形になった。自分に戻れるのは、寮の自室に戻った時だけ。

しかし、そうした生活にも無理が出てくる。工場移転と同時に起こった転属先で、更なる圧政、パワーハラスメントに遭い、遂に壊れた。生きる意思を失い、迷い、産業医に認定されて精神科に駆け込んだ。その後しばらく休職した後に復職したが、状況は悪化するばかりで取り返しも付かず。自分の会社勤めは、17年あまりで幕を下ろすことになる。

その後、茨城に拠点を移したが………大会社に飼育殺しにされ、個性も思考能力も処理能力も封殺され、会社の都合のいい歯車として順応することを強制された、四十路間近の無能人間には、再就職など極めて困難だった。仕方なくアルバイトで生計を立てようとしたが、その勤め先でも、上司による不当な人格攻撃を受け、二度の自殺未遂。入院。解離性障害と発達障害との診断を受け、事実、入院から約二年間、解離性障害による記憶障害、離人症、失語症を患うことになった。

あれから二年あまりが経ち、記憶障害、失語症は

改善されたものの、離人症による深層意識との戦いは続いている。友人曰く、「血縁上の父親や妹など、屑人間たちに受け続けた呪い」とのことだが、言い得て妙だと思う。その影響は今でも色濃く残っている。

自分が思うに方言の封印は、そうした「呪詛」を盤石なものとした、極めて強力な強制力、或いはその増幅システムのように思える。事実として、17年間。会社にいる内は、自分の意思を行使したことは一度たりともなかった。標準語、敬語が「仮面」となり、今も緋い交ぜとなってしまう。そのトリガーとなったのは、明らかにあの配属初日の上司の命令だった。あれもまた「呪いの言葉」だったのだろう。

方言は、お国言葉、とも言うが。自分には帰るべき故郷は存在しない。あるのは、自分に人生クラスの呪詛を堆積させ続けてきた、実家という名の監獄しかない。そんな自分であるが、茨城に移り住み、二度の退院を経て後、エナベルにお世話になり、グループワークをきっかけに駿煌会の人達とも出会って、新たな生を受けた。自分にとってこの地こそが、解放された魂の故郷であり、骨を埋めるべき終の地でもあると、今は強く感じている。』

社員が企業の部品でしかないという発想で五常さんのように苦しんでいる方々は大勢いらっしゃいます。しかし日本は本当にそういう発想の国だったのか…その点からグループワークで、組織論の参考として期飛鳥時代からの宮大工の口伝についてとりあげたことがあります。(宮大工棟梁 西岡常一 1908-1995 注6)

中でも「癖の強い人間をそのまま癖を活かして使え」というのは、学校でも職場でも、みんなの輪に入るためには自分の想いを殺し、平均的な自分を必死に我慢しながら演じ続けなければ駄目なんだと思ひ込まされていた方々には信じがたいようでした。

しかし宮大工の世界に限らず日本の歴史や文化をふりかえてみると、そんな画一的な構えにがんじがらめに縛られているわけではなかったという事例がいくらか出てきます。

また、この手記に書かれている問題は、方言に限らず乳幼児の頃からの「外国語教育」にも通じると考えています。(宮田 (2018b) 参照)

英語の感覚を幼い頃からというのは裏返せば日本語の感覚や思考体系等々が育つことを犠牲にすることになります。日本人の特性が貧弱な人間が本当に

国際人として他の国々の方に尊重されるのでしょうか？自分の国の歴史や文化への無知が冷ややかな目で見られるということはよく耳にしますが、このことはそれ以上に深刻な問題です。

百歩譲って、仮に英語でのコミュニケーション能力が多少あがったとしても、どんな内容の語り合いをするのか…中身が豊かな人間であれば多少英語が苦手であっても海外の人は話したいと思ってくれるのではないのでしょうか。（注7）

それが今や日本人同士のコミュニケーションでも同様な問題になっていると思うのです。幼い頃からの英語教育で日本語が乏しくなり友達とコミュニケーションがとれずに精神を病む幼児が出てきているというテレビの特集もありました。（注8）

方言で話そうが、口下手であろうが、人間として当たり前であればきちんと交流はできます。

なのにこうした能力が十分に身につけていなければ、人間としての存在が認められないかのような印象を学校や社会が植え付けすぎていると思います。

エナベルで最近「昭和の流行り」が話題になったことがあります。居間にテレビが一台しかない家が多かった影響などで、特に関心がない事柄でも流行ったこと大抵の人が知っています。なので「ああ、あれね」とすぐに共感しあえます。しかし平成・令和と進む中、そうした幅広い人達に通じる共通感はどんどん薄れているようです。はたして今の若者達が中高年になった時に、どのくらい共通の懐かしさを持っているか、というやりとりでした。

それと同様な危惧を母国語の響きに対して抱いています。以前、いかにも乳児の頃から英語教育を徹底しているような日本人親子をみかけたことがあります。祖母のことをネイティブのような発音で「グランマ」と呼んでいました。はたしてこの子は昔話などで「おばあちゃん」等々の言葉にふれた時に日本人なら普通に伴うような感覚が湧いてくるのか…。やがて「自分の言語感覚が周囲と違う」と知った時に、自分には母国と呼べるものすらないという寂しさ以上のことを感じてしまうのではないかと心配です。同じ日本人同士で言葉を交わしても響き合えず同郷意識を感じられなくなるのですから。

## 8、「数理的発想」と「類化性能」

利用者Kさんのブログにこのような記録もあります。

『今回のグループワークでも色々な話が出ましたが、主に数学とコミュニケーションについて話しました。…まずは数学とはなんのためにやるのかということを含んで考えました。…M先生は、文系こそ数学的思考（数学的発想）を日常で使っているということを述べていました。古代では哲学は数学や自然科学と同義とされ、哲学ではこの世とはなんだろう？人生とは、生きる意味とはなど自然と個々人で考えていることであると聞き、Kは哲学にも学生時代苦手意識を持っていましたが、もっと身近なものであったのかと思いました。…

哲学の話から人間関係論（コミュニケーション）の話になりました。…

数学は苦手意識を持っていたものでしたが、意外と身近なところにあり、自然とよく使っていたものだったのだなあ実感しました。今回も色々な発見のあるグループワークで良かったです。次回のグループワークもどんな話になるのか楽しみです。』

（令和2年6月15日ブログ）（注9）

国語とは離れますが、ここで「数学」と「コミュニケーション能力」「構えの変革」とのつながりについて言及しておきたいと思います。

数学の大きな特徴は多様な事象などを数式や記号という形で抽象化して表すことにあります。それによって一見異なるものであっても本質的には同じ構造を持つものとみなして…異なる世界同士の架け橋になっていくわけです。

そうしたつながりを見出す能力を上原先生の師匠である国文学者の折口信夫先生は「類化性能」と呼んでいました。私はこの類化性能をアップさせることが、これまで無関心であった話題や、内容がほとんど分からない話題に、我慢ではなく、自分との接点を実感しながら加わっていきける。各教科・領域で学んだことも、そこから抽象化させながら受け止めることが出来るからこそ、表面的には関係なさそうな多様なこととも結び付けて考えていくことができる…駿煌会では「圧縮と解放」と呼んでいます。（宮田2018a 参照）

板書（連歌）の内容を振り返って通性を感じ取るのも類化性能があつてのことです。それ故に「構えの変革」につながっていくのだと考えています。（宮田2018b 参照）

こうした発想も今の教育現場には乏しいようです。その一つの表れが、教育カリキュラムの中に「○

○教育」というお題目のついたものをいくつも入れようとする姿勢です。人間力そのものがきちんとアップしていれば多様な問題にもその都度きちんと対応していけると思うのですが…。

「構えの変革」にとって類化性能の向上は不可欠であり、その最も基礎となるのは数学的な発想です。後述する「言葉の意味の再確認」もこれと同じ発想で行っています。日本の様々な文化の背景には、一般に思われている以上に数学的な発想があることを教育関係者すべてが再確認する必要があると考えます。

## 9、「“平等な社会”という社会の構え」の問題

「差別のない社会の実現」というのは非常に大切なことであるという点に異論はありません。ただ実際に利用者みなさんの声をきくと「みんな同じだね。同じ人間として変わらないね」という面ばかりが一人歩きして、それが逆に違う「差別」になっていると感じている場合も多いようです。そういう言葉をかけてくれる人が悪意ではないことは十分に分かっていても、この言葉は「自分の苦しみを分かってもらえない」「分かるうとしてもくれない」と聞こえ、非情な寂しさを感じてしまうというのです。

「実際の苦しみをそのまま分かってくれとは言わない。実際に発作の大変さも、薬の副作用の辛さも、経験した人でないと分からないだろうから。でもそういう精神疾患をかかえている人の辛さにも率直に耳を傾けてほしい」という声。実際にエナベルのブログにも、そうしたことへの理解を毎日のように訴え続けている方がいます。

### ウサギのTさん

「ひきこもり支援というと就労ありきだが…深くのどこにある自分自身の否定。働け！と簡単に言うけれども、傷が深いために、その言葉さえ空に舞う感じ。簡単な言葉では表せない感じですかね…？

他の人と同じことができない。普通の人と同じところに行けない。立てない。一步踏み出す勇氣、それはとてつもなく大きな勇氣。…引きこもりの方はコミュニケーション不足が最大の悩みですよ。人に触れたいけど、人に会うのが怖い…。話したいけど、話せる人がいない…。」（2020年6月4日）

(<http://hw-enable.com/> 関連ニュース 障害者)

こうした理解してもらえない寂しさが増大してく

ると、精神疾患が改善していくことを無意識に拒む場合も出てくるようです。周囲が自分を意識してくれているのは病んでいるから…それが治ったら注目してもらえなくなる、という寂しさと恐怖。だから「普通と変わらないよ。大丈夫だよ」というのを受け入れることは、自分の唯一の存在の証を失うことになるので必死になって「自分はみんなとこんなに違うんだ」と頑なに言い張ってしまう場合もあると。

またこれはどこの就労支援施設の現場でも課題になっているそうなのが、人間関係の挫折を繰り返している方の中には本音では就職したくない、頑張ってもその後の人間関係で苦しみ続けるんだったら就職できない方がいいという姿勢。

「その人自身を本当に認めた上での平等な社会の実現とは一体どういうことなのか？」これは現代社会にとって大きな課題の一つです。

もう一つ出ていたのが「赤ちゃん言葉での言葉かけ」でした。これは老人施設でもよくみられることですが、相手に優しくかける言葉が、小さな子どもにかけるような言葉遣いになっていて、言われた方は自尊心をひどく傷つけられているという問題です。もしかすると小学校の頃から「気の毒な人には優しくしてあげましょうね。困っていたら助けてあげましょうね」という指導をされているうちに知らず知らずとるようになってしまった構えかもしれません。善意であるのだからという気持ちで受け止めたとしても、「余計な気をつかわせてしまっている。やっぱり自分は迷惑で劣った存在なんだ」という自己否定につなげてしまうという声もありました。

他にも「頑張って」という励ましで余計に追い詰められる、等々様々な悩みが最近のグループワークでは打ち明けられるようになってきています。

このようにみていくと「構え」を通して自分の内面にある縛りを様々な角度から見つめ直すことは、この歪んだ世の中を人間らしく生きていくために、すべての人たちに必要であることが分かります。

## 10、生命力の根源たるイメージ運動

—古来日本人の「子育ての知恵」—

特に幼少期においてはイメージ世界（夢の世界）が心の全てと言っても過言ではありません。それだけにこの世界が幼少期から大人によって否定されてしまうと、子どもにとっては自己の全否定に等しく、生涯においてあらゆるダメージをひきずることにな

ってしまいます。

しかし現実には「早くから理性に目覚めさせるのが優秀な子どもを育てる」という教育観や「現実離れた空想の世界に浸っていた人の反社会的行為」等々の報道の影響もあって、早くから現実意識に切り替えさせなければという風潮が強まっていると思います。またアニメやゲームに夢中になることは、即「テスト勉強の妨げになる」という発想も子ども達を追いつめ、根底から揺さぶっています。

上原先生は「イメージ」を「何を想像したのか」ではなく「イメージ運動」として捉え、人間の生命力そのものと結び付けて考えられてきました。

人間は生涯イメージの世界から離れて生きる事はできません。しかし、幼い頃からの自然なイメージ運動が封印されると、そのエネルギーが強い子どもほど屈折し精神を病んでいってしまうと考えます。

私は精神疾患の専門家でもないので軽々しくは言えない立場ですが、「統合失調症」などで「妄想や幻覚を抑える」という治療の話が一人歩きして「イメージの世界そのものの否定」に縛られている方々も多いと感じています。

仮に投薬で妄想や幻覚の症状を抑える事ができても、本来のイメージ運動まで抑えられてしまったら生き甲斐ある人生への構えの復活にはなかなかつながらないのではないのでしょうか。

時代錯誤と言われるかもしれませんが、やはりきちんと再確認すべきなのは、かつて日本人の子育ての根底にあった「七つまでは神のうち」「通過儀礼」等々の考え方です。

私が中学生だった時、父の実家で幼い甥が私の私物をいたずらしくしたので叱りつけたことがありました。その時に一緒にいた祖母がニコニコ笑いながら「しょうがないよ、神様だから」と言ったのを今でも忘れません。そんな大人に囲まれながら幼少期を過ごしていたわけです。

それを経た上で年齢に応じて「今日からはこうするんだよ」と人間界のルールを気位と共に躡けていく、という手順です。

「三つ子の魂百まで」という言葉を早くから大人の思う通りになるよう躡ける根拠とする考えもありますが、本当は幼少期における夢の世界の重要性を説いた言葉なのだと思います。それがその子にとって最も持ち味を発揮していける「構え」の獲得のベースになるのではないかと考えます。

最後に上原先生の言葉を紹介し本稿を終わりにします。

『教育は投薬ではない

それは生まれ出た人の子が、人の心を  
獲得していく過程を保証することである』

(注10)

\*\*\*\*\*

(注1) 駿煌会 宮田が主宰する年齢も立場も異なるグループ。

『アニメや理数や民俗学など雑多なことを通して人間(心意伝承)についてあれこれと考えようとしている年齢も性別も職業も違う4人でスタートした集まりです。(2020年8月現在ライン参加は11人) ブログだけではなくホームページもあります』  
ツイッター紹介文より

<https://twitter.com/syunkoukai?lang=ja>

(注2) かつて「我慢」について考察したことがあります。「させられる我慢」ではない我慢です。

宮田雅智(1988)「子どもの『気どり』に関する一考察：我慢の美意識」児言態雑誌13号

(注3) 河合隼雄(1998)「こころの処方箋(新潮文庫)

(注4) ユング(1973)「ユング自伝 9章 旅」みすず書房

(注5) 昭和44年「にほんのおばけ話」童心社

(注6) 西岡常一(1988)「木に学べ 法隆寺・薬師寺の美」小学館(1993)「木のいのち 木のこころ 天」草思社

(注7) NHK視点・論点「小学校から英語は必要か お茶の水女子大学教授藤原正彦」(放送日は不明) 国語の重要性について詳しく述べている著書 藤原正彦(2005)「国家の品格」新潮社

(注8) NHKニュース内の特集「何が大切? 早期教育」(2011 放送日は不明)

(注9) Kさんによるグループワークの記録ブログ 記事8月分までのリスト

及びその際の板書の画像を駿煌会ホームページ内(<http://syunkoukai.komusou.jp>)に掲載しています。

(注10) 上原輝男(昭和58年)「感情教育論」学陽書房